WAVE#5

ウェイヴ#5 発行■WAVE 発売■ベヨトル工房 定価■1200円(本体1165円) ISBN4-89342-043-7 C0070 P1200E

Aと一緒に食事をしたことがある。おこげ御飯。カラカラに焼かれた御飯に汁をかけるとジューという音を立てて食卓一杯に蒸気が舞い上がる。Aは無関心そうにながめていた。『ガラチア』という二回目の公演では、舞台におこげ御飯が登場した。熱くしたコークスに水をかけたようだが、なかなか感じがでていた。素直じゃないな。

今回は『ライチ』。まさかおこげ御飯を食べた後に出た、デザートのライチじゃないんだろうな？　そうだよ。Aは、いたずらっぽく笑う。ライチをエネルギーにする人造人間ライチ（嶋田久作）。少女に恋をして意識を獲得する。『ライチ』はどうも模倣かずおの『わたしは真悟』を下敷きにしているようだ。少女の名前はマリンだし……。

東京グラン・ギニョルの芝居を作っていく興味は、どうも社会などというものからはるかにかけはなれている。デザートのライチだったり、漫画だったり、ミュージシャンのイメジだったり。彼らも、大きな意味でメタの時代に生きる演劇であると言えよう。

役者の質も変化している。それは、見る側の変化でもあるが、演技を見るより生地に近いキャラクターを見るようになっている。キャラクターということにかけては、東京グラン・ギニョルの嶋田久作が断突である。人工骨を埋め込んだような顎、しゃべりながらよだれが垂れてしまう体質、狂ったような踊り。演技を超えたキャラクターは一見の価値がある。

東京グラン・ギニョルは、公演が終了する度に役者が離散する。バンド活動をする者や、学校に戻る者……。再び戻ってくる者も少しはいるが、ほとんど新しいメンバーで次回の演劇を上演する。これも時代的だ。彼らには、行為する価値はあっても評価される意味はないのだ。

好きなイメージ、好きな音……。それがやれなければ舞台はできない。

ノ』というLPを最近リリースした、最も少年らしい少女。おそらく越美晴は、自分のことを僕と言う少女に違いない。Aの世界は敢えて未熟である。

Aは、老人のような意地悪な目つきをする。押し殺したような声で、ケケケケと笑っている。少年達の秘密結社。Aは、決して秘密結社を主宰しようとはしない。結社を主宰する少年に一目置かれる外部の存在。そのくせ結社に影響力がある。どこの学校にもそんな切れ味の良い少年が一人はいたはずだ。決して二〇歳を超えられない少年が。Aは、あらゆる人間の少年期に復讐しようとしている。

Aは、J劇団で音響をやっていた。歌謡曲ばかりが使われた。その時にはあまり気にしていなかった。タップ・ダンサーが出る芝居が上演されることになり、タップ・ダンスを練習することになった。地下室で練習していた時にAはふと少年期を思い出す。こうやって地下室で、足をどんどんどんと踏み鳴らすのが僕達のダンスだったんだ。記憶が甦った少年は、再び劇団に戻ることはなかった。PILのドラムに合わせて少年達が、足を踏み鳴らす『マーキュロ』のオープニング・シーンはこうしてできあがった。

東京グラン・ギニョルの第一回公演『マーキュロ』は、劇画家・丸尾末広の作品のイメジを舞台化したものである。丸尾末広の劇画を舞台化したかったから……歌謡曲じゃなく僕達の好きな曲で舞台を作りたかったから……Aは、そんなことを呟いた。分かったような気になって、劇画を舞台化するアナーキーでロマンティークな東京グラン・ギニョルなどと書く。しばらくしてAに会うとちょっと眩しそうな顔で「僕、そんなこと言ってないよ。丸尾末広の劇画に舞台が似てないって言われて迷惑しているんだ。」などと言う。

増殖する"少年A"

少年時代へ向けられた終わりを知らぬ復讐劇は――。

東京グラン・ギニョルの演劇には、少年がたくさん出てくる。少年しか出てこないと言ってもいいくらいだ。成熟した女は、豚のように扱われ鉄のペニスを差し込まれる。そして『ライチ』の物語から突如として消去されまったく登場しなくなる。犯され軽蔑される為にだけ物語に挿入された女。Aの物語に許されるのは、たった一人の少女。『ライチ』では、越美晴が粉するマリンと呼ばれる少女。越美晴――『ボーイ・ソプラ

★写真はいずれも『ライチ』(1985年12月)の公演。

Tokio Grand Guignol

東京グラン・ギニョル

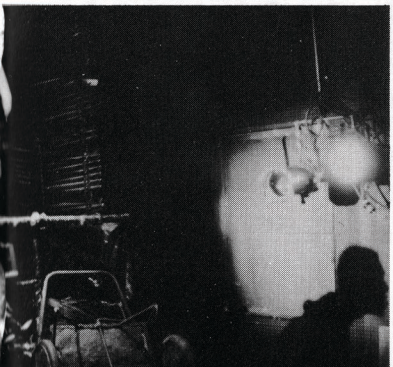
一五歳の春は決して終わることがない。この都会に漆黒の闇を呼べば。最期の少年期があとわずかで消費されつくされる時に、Aは一人呟いた。少年が特権的な階級であったことを心底、口惜しく思い出すようになったのは、もう二〇歳を越えた頃だった。Aは思う。何故あんな呟き一つで、少年期を終わらせてしまったのだろうか。少年の残像の中で自分だけは永遠に歳をとらない、少年でいられるということを信じていたのかもしれない。呟いてみたが、それは、単なる強がりなポーズのつもりであったのに……。だからそれは、少年を延命するAなりの儀式のつもりであったのだろう。しかしやはりあの呟きは、まさにAの少年期の終焉を位置づけていた。それが、今では鮮やかに意識化できる。

ならば精神の安易さの為に、モラトリアムの状態にしてあった、殺意とか残酷はどう昇華すれば良いのだろうか。Aは、終焉してしまった自らの少年期に逆上する。

少年が、時代のテーマである。少年がそこかしこに氾濫している。しかし良く語られることを望まれた少年達である。Aは、ネガティブな少年である。

カリスマ性を帯びるスターはどこか必ず少年的である。近ごろは、少女のスターですら少年的である。Aは、世に聡い人間が装う少年ではなく、決して背が高くならないような悪意をもって少年にとどまっている少年である。

Aは、端正な顔をしている。しかし自分の顔が一番美しく見える角度を知らない。美しさによって、老人を誘うような純粋さを持ち合わせてはいない。どんなに醜く見せても、少年である輝きが少しも失われることがないことを自信を持って知っている。だからAは、最も少年らしい残酷さを顕わにする。



i·m·a·g·i·s·o·n·i·c

WAVE

ウェイヴ5

POP
Avant-Garde
Magazine

METAFICTION
メタフィクション

W・バロウズ
坂本龍一
武田光俊
T・ピンチ&ミンス
佐藤良明
D・バーセルミ
J・バース
外国書紹介
しりあがり寿
東浩紀
ブコウスキの世界観
高橋源一郎
浅田彰 VS 大島渚&ウチ
S・キューブリック
ジェイムズ・ジョイス
★
中沢新一